第1章 戦場

朝鮮半島での終戦

決死の航海 ～生きて日本にもどりたい～

山田三郎さんのお話から

○ミッドウェー海戦　第二次世界大戦中、昭和十七年（一九四二年）、ミッドウェー島をめぐって行われた海戦。日本海軍は、この海戦で大敗。以降、戦争における主導権を失った。

○海軍飛行予科練習生　日本の海軍飛行養成制度の一つ。志願制。通常、予科練と略称で呼ばれることが多い。

○鹿児島県出水海軍航空隊　第一出水海軍航空隊のこと。昭和二十年（一九四五年）二月十一日解散。朝鮮半島の光州に移転。

○編隊飛行　飛行機が組んで、隊形を整えること。

昭和十八年（一九四三年）に入り、海軍では旧制中学校の四、五年生を対象に航空機搭乗員を大量募集しました。前年のミッドウェー海戦で負け、ベテランパイロットのほとんどを失ったためです。この時選ばれたのが、私たち第十三期海軍甲種飛行予科練習生です。北海道や樺太から集まった千四百名は土浦海軍航空隊に入隊しました。

パイロットになるためには二年半の教育を受けるのが普通ですが、私たちはわずか九か月で卒業させられました。戦況が悪化していたらです。操縦と偵察に分けられる検査の結果、操縦担当となり飛行術練習生として鹿児島県出水海軍航空隊に転隊しました。

転隊早々実地訓練です。その厳しさは想像以上のものでした。教官の指導で練習生と二人の同乗飛行、それが終わると単独飛行です。さらに編隊飛行も行いました。そんななか、航空隊の存在を米軍に知られてしまい、攻撃を受けるようになりました。この場所での訓練ができなくなり、今度は朝鮮半島の全羅南道光州海軍航空隊に移動し、終戦までの約三か月間訓練を受けました。訓練の期間が短いため、訓練機が突っ込んできて仲間が犠牲になることもありました。

八月十四日、光州海軍の航空隊内に知らせが入りました。「明日正午全員集合。一切の訓練は中止。」ということです。しかし、この玉音放送は音が低く、途切れ途切れかすかに聞こえる程度で、何を話しているのかよく分かりませんでした。次の日、「日本は戦争に負けた。戦争は終わった。」と航空隊司令から伝えられました。

二十五日、航空隊は解散となり、光州から脱出することになりました。私たち十三人は車で

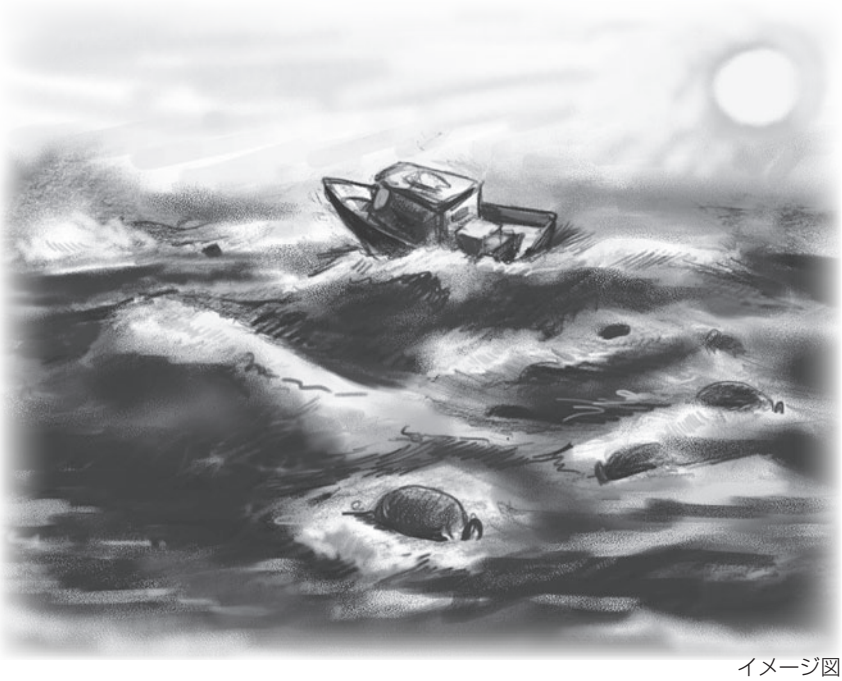
○玉音放送　天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。
○鎮海　現在の大韓民国慶尚南道昌原市に属する行政区画。日本の海軍基地があった。
○衣のう　海軍が支給した自分の衣服などを収納するかばん。
○航空糧食　軍隊で主に緊急・戦闘状態時に食される保存食料。

鎮海へ向かうことにしました。衣のうに軍服や身のまわりのものを入れて出発しました。自家用車一台、バス一台、燃料車三台を確保しました。バスの座席を全部取り外し、米十数俵、焼酎、缶詰、航空糧食などを山ほど積んで、各自が拳銃を持って出発しました。一人は燃料車に交替で馬乗りです。土けむりが舞う強風のなかの行軍でした。鎮海に到着しましたが、人の気配がありません。私たちは釜山へ向かうことにしました。

釜山では、日本へ帰るための船を入手しようと現地の漁船を見つけて交渉しました。三万円で船を出すといわれましたが、十三人全員の所持金でもたりません。そこで、帰国したいと港の埠頭に集まっている日本人に「一人二百五十円」と声をかけ、何とか七十五名を集めました。

しかし、今度は「百人にならないと出航しない。」といわれました。焼酎を飲ませてやり、缶詰を持っていき、やっとのことで船を出してもらうことになりました。

衣のうに缶詰など食料を詰め込み、米俵を持って、残った車、機関銃、弾丸は埠頭から海に投げ捨て、夕暮れ時に出航しました。七十五名とその荷物の重さで、デッキは海面より三十センチほどしかなく、とても怖かったです。「十六時間で下関に着く。」という船長の言葉を信じ、「早く脱



イメージ図

浮遊機雷をよけて日本へ戻る船

○アンカー　いかりのこと。船などを水上の一定の範囲に止めておくため、つなやくさりにつけて水の底へ沈めて使う道具。
○浮遊機雷　風または潮流により水上や水中を自由に浮遊させる爆弾。船などが接近・接触したとき、自動または遠隔操作により爆発する水中兵器。
○コンパス　羅針盤
○対馬　九州の北方、玄界灘にある長崎県に属する島。
○潤滑油　エンジンオイルなど機械の歯車などを効率よく潤滑するための油。
○帆走　帆に風を受けて船を走らせること。

出したい、命だけは助かりたい。」と一心に願い、東の海を見つめていました。

ところが漁船は三十分走行しては、一時間流され、また三十分エンジンをかけて一時間停止する。この繰り返しでさっぱり進みません。船長に聞くと、「アンカーを落としたので探している。」といいます。それを聞いて誰かが「以前、島で降ろされた人がいたぞ。」と叫びだしました。あたりにはたくさんの島がありました。私たちは恐怖と怒りで感情が爆発しました。船長から船を奪い、暗闇のなか私たちの手で何とか漁船を東に向けて走らせました。

一夜明けた朝は大しけでした。さらに海面にたくさんの浮遊機雷を発見しました。衝突したら爆発します。恐怖にふるえながら船を操縦しました。暗黒の荒れた海のなか、コンパスだけを頼りに東へ突っ走りました。今思えは、よく浮遊機雷に触れなかったものだと自分たちの運の強さに驚くばかりです。何度か米軍機が私たちの船を発見し、高度を下げてきました。上半身裸だった私たちはそのたびに上着を身につけ、弾丸が当たったときのことを考えました。全員がテントをかぶり、無人の漂流船のように見せかけました。

やがて夕方近くになりましたが、対馬もいまだ見えず、エンジンが止まってしまいました。潤滑油がなくなり、エンジンが焼ききれたようです。そこでテント四枚を張り合わせ、短いマストにテントをあげて帆走を始めました。しばらくすると誰かが「せっけん水が潤滑油の代わりになると聞いた。」

イメージ図

衣のうに缶詰などを入れる様子

○暗礁　海中に隠れて見えない岩。

○角島　山口県下関市豊北町に属し、日本海に浮かぶ島。

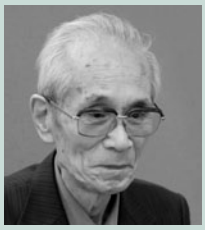
というので、水を飲むのをやめてせっけん水を作りました。それを入れたところ、再びエンジンが動き始めました。十分くらいするとまた止まりました。再びせっけん水を入れて動かすということを何度かくり返していましたが、とうとうエンジンはかからなくなりました。

二晩目を迎え、ようやく本土の灯りが見え始めました。三十日夜、その灯りが近付くなか、前方に黒い島影が見えてきました。誰かが「島に着けよう。」といいましたが、「無人島だったらどうする？」「暗礁にのりあげたら船は転覆して荷物がだめになる。」と言い争いになりました。釜山を出航したときは、「どうか命だけでも。」と思っていたのですが、だんだんと荷物を手放すのが惜しくなってきたのです。

やがて東の空が明るくなり、真っ赤な太陽が昇ってきました。島の漁村に向かって、「助けてくれ。」と叫びました。浜辺では人が騒ぎ出し、やがて船が近付いてきました。そこは下関から約五十キロもはなれた「角島」という島だと分かりました。私たちはようやく日本の土を踏むことができました。

海軍甲種飛行予科練習生として入隊し、訓練中に六名の仲間を失いました。また、この太平洋戦争で九千五百名を超す若者たちが、来る日も来る日もただ死が待っている戦場に特攻し、命を散らしていきました。二度とこのようなことをくり返してはなりません。命の尊さを知り、生きることの大切さを学んでください。そして、生きるために何が必要かをみなさんに考えていただきたいと思います。

DATA



平成21年度清田区平和事業
聴き取り
・平成21年9月29日
・清田区役所

山田三郎（やまだ・さぶろう）さん
・大正13年（1924年）生まれ
・札幌市清田区在住